香川大学経済論叢
第78巻 第4号 2006年3月 19−43

# アメリカ第一の市民：ジョン・ビゲロー

大賀睦夫

## I はじめに

筆者は，スウェーデンボルグの宗教思想がアメリカにおいていかに受容され，いかに社会に影響を与えてきたかを検証する作業を続けている。今回取り上げるのは，ジョン・ビゲロー（1817−1911）という人物である。彼の生涯をあとづけ，スウェーデンボルグの宗教思想が，19世紀のアメリカのひとりの人間の生き方をいかに変えたか，ひいてはアメリカ社会にいかなる影響を与えたかについて考えてみたい。

ジョン・ビゲローは，今日，一般にはほとんど知られていないが，19世紀の中頃，アメリカのジャーナリズムや政治の分野で大いに活躍した人物である。奴隷制廃止，刑務所の改革，民主主義の啓蒙活動，汚職を防止するための政治改革，公共図書館の新設など，多くの公共の問題に積極的に取り組み成果を残した。彼は政治的にはラジカルなジャクソニアン・デモクラットとして出発しているので，もともとそのような活動を志向する傾向があったといえるのかもしれない。しかし，宗教的には不可知論者であった彼が，後にスウェーデンボルグの宗教思想の強い影響を受けて回心したことも，その後の活動に大きく関係したことは確かである。少なくとも動機のレベルで，彼の活動は大きく変化した。スウェーデンボルグの著作の読者であったにもかかわらず，ではなく，まさしくその読者であったからこそ，彼は20世紀の初頭にニューヨークの人々から「アメリカ第一の市民」と賞賛されるほどの活動をなしえたのである。(1)

しばしばスウェーデンボルグは隠棲した神秘主義者であるかのように誤解さ

れているが，彼自身は鉱山監督官として，貴族院議員として，スウェーデンのために大いに働き貢献した人物だった。彼の教えの核心は，役立ちの生活を実践するというきわめて積極的なものである。ビゲローの人生を振り返ると，そのようなスウェーデンボルグの宗教思想の核心が見えてくるように思われる。

## Ⅱ　ビゲローの生涯

### 1　生い立ち，青年時代

ジョン・ビゲローは，1817年，ニューヨーク州オルバニーに近いブリストルという小さな町で，父エイサ，母ルーシーの4番目の子どもとして生まれた。父の先祖はイギリス人で，アメリカにおけるビゲロー家の最初の人物は，17世紀にマサチューセッツに渡ってきた同名のジョン・ビゲロー（Biglo or Bigulah）であった。5代目のエイサは，商業で身を立てるべく，ニューヨーク州に移り住んだ。ビジネスチャンスを求めて西へ移動するというのが当時の習いであったからである。信仰心篤い家庭で，宗派は長老派であった。

ニューヨーク州の田舎町で育ったジョン・ビゲローは，17歳でニューヨーク州スケネクタディのユニオン・カレッジを卒業すると，弁護士で身を立てるべく，マンハッタンに移り住んだ。「デイ・アンド・ボニー」と「ロバート・アンド・セオドア・セジウィック」という二つの法律事務所で法律家の見習いとして働き，21歳で弁護士の資格を取った。そして1年間女学校で教えた後，弁護士としての仕事を始めた。しかし，ニューヨークには弁護士が多く，また彼の知り合いは弁護士か若くて金のない人々がほとんどだったので，客はあまり期待できなかった。そこでゆっくり仕事を待ちながら，彼は自分の趣味にはげんだ。

（1）1クラップはビゲローを次のように紹介している。「ジョン・ビゲローの姿を見ると，台上の巡査は背筋を伸ばして敬礼し，市民は帽子のひさしを上げて会釈をした。ニューヨークの人々は，マディソン街を闊歩する彼の姿を見るのが好きだった。ビゲローは90歳ながら，ピンと背筋が伸びて背が高く，凝った古風な服に身を包んでいた。豊かな白髪は血色のよい頬のひげにつながり，灰色の瞳は強烈な好奇心で輝いていた。20世紀の初頭，人々は彼を「第一の市民」と呼んだ」。（Clapp（1947），p. vii.）

彼がもっとも充実感を覚えたのは著述活動で，しばしば論文を雑誌に投稿した。徒弟時代に法律事務所で知り合った人々の中には，雑誌の編集者や雑誌への投稿者が少なくなかったということも刺激になっていた。彼のこの頃の知己には，ウィリアム・カレン・ブライアント，サムエル・ジョーンズ・ティルデン，ジョン・オサリバンなど後世に名を残した人物が含まれている。ブライアントは著名な詩人で『ニューヨーク・イブニング・ポスト』の編集者であった。若きティルデンは政治を志す青年で，後にニューヨーク州知事を務め，1876年の大統領選挙では民主党の大統領候補になる。オサリバンは『デモクラティック・レビュー』の編集者で，アメリカの膨張主義のスローガン「明白な運命」の作者としてよく知られている。

ビゲローの最初の論文は「帝国以前のローマにおける弁護士業」で，『ニューヨーク・レビュー』に掲載された。これは主としてキケロの手紙に依拠しつつ，ローマ時代の弁護士業と現在のそれとを比較した論文だった。初めての論文が雑誌に掲載される喜びを，後年，彼は次のように回想している。「私は論文をその雑誌に載せてもらおうという野心で奮い立っていた。そして論文が受けいれられる見込みは十分あった。…数週間後に，直ちに返送するようにというメモつきで，校正刷りが送られてきた。…その日は私にとっての祝日だった。論文が出版されると思うだけで胸がドキドキと高鳴った。…もしこの論文が拒絶されていたら私の人生はどれほど違ったものになったことかと思わざるをえない[(2)]」。ささやかな成功を味わったビゲローは，その後も論文や書評を雑誌に投稿した。サンタフェ街道の見聞録であるジョサイア・グレッグ『大草原の通商』の出版を手伝ったのもビゲローであったが，これはビゲローの文章力を評価したブライアントが，彼をグレッグに紹介して実現したものである。こうしてビゲローの名はジャーナリズムの世界で徐々に知られていくようになった。

## 2　ジャクソニアン・デモクラット：ビゲロー

彼のもうひとつの関心事は公的生活への参加であった。これは当時の時代精

（2）　Bigelow (1909), p. 57.

神そのもののあらわれでもあった。彼の青少年期である1820年代から1840年代のアメリカは，ジャクソニアン・デモクラシーの時代である。建国以来の東部出身のエリート大統領に代わって，西部出身のたたきあげのジャクソンが大統領になった。普通選挙制が全国的に拡大し，経済的利益における機会均等も強く主張されるようになった。ジャクソン主義の平等主義とは，絶対的平等を求めるものではなく，個々人の能力の多様性と善なる人間本性を認めた上で，すべての人の能力が十全に発揮されなければならない，そしてそのためには，機会が均等に与えられ，競争が自由に行われなければならないという考え方であった。ビゲローは少年時代，青年時代をそのような時代風潮の中で過ごした。

理想主義的でラジカルな民主党員として，彼は奴隷制に反対し，メキシコの領土の略奪にも反対した。その点で同じ民主党ながら南部の保守的な民主党勢力とは一線を画していた。彼によればアメリカ人の第一の義務は自らの選挙権を適切に行使することであった。一票を賢明に投じれば，各人にとっても国全体にとってもより望ましい結果が得られるであろう。

ビゲローにとって最初の選挙は1840年の大統領選挙で，このときにはヴァン・ビューレンに一票を投じた。しかし当選したのはホイッグのハリソンだった。当時の政治的対抗関係は民主党対ホイッグであったが，民主党の中も保守とラジカルに分かれており，ビゲローや仲間のティルデンらは，選挙においても政策においてもラジカルな民主党の勝利をめざして運動を進めていた。ニューヨーク州で政策的に彼らが実現しようとしていたのは，小さい政府であり，憲法改正であった。州の運河建設の公共事業を中止させる1842年の法律が州憲法との関係で問題になった際には，「アメリカ政治の起源と理論」と「憲法改革」という二つの論文を執筆した。彼が研究したのはジェファソンとトマス・ペインであり，両者の政治思想に傾倒していた。

ジョン・オサリバンは，ラジカルな民主党員を大統領候補にするためには，現在発行している『デモクラティック・レヴュー』だけでは不十分であり，日刊の新聞を発行する必要があると考え，『モーニング・ニュース』の発刊に踏み切った。そしてビゲローはこの新聞の編集者に抜擢された。1844年の大統

領選挙に際しては，仲間とともに，州の民主党大会で報道席に陣取り，ジャクソン信奉者で奴隷制反対論者のサイラス・ライトが指名されるのを見とどけた。ニューヨークにおいてホイッグに対抗する論陣を張ったのは，オサリバンの『ニュース』とブライアントの『ポスト』のみであり，ラジカル民主党の活動を通して，ブライアント，オサリバン，ティルデン，ビゲローの友情と結束は一段と強まった。

### 3　刑務所監査官

1845年，28歳のとき，ビゲローはニューヨーク州知事サイラス・ライトによって，州の刑務所の5人の監査官の一人として任命された。これはティルデンらとの親交の果実であった。ビゲローの友人ティルデンは，ニューヨーク州議会議員になり，ライト知事の顧問になったが，彼が刑務所改革のための適任者としてビゲローを強く推薦したのだった。また『デモクラティック・レヴュー』のオサリバンも彼を推薦した。ビゲローは制度改革に貢献したいという理想主義的情熱と，このような経歴をこれからの法律や政治の道に生かしたいという実利的な関心の両方から，このポストへの就任を受諾した。

当時，刑務所の改革は全米的な関心事であった。ドロセア・ディックスが国内の刑務所を調査して書いた『合衆国における刑務所と刑務所規則』は，アメリカの刑務所における受刑者の実情を明らかにして全米に衝撃を与えていた。いずれの刑務所においても，受刑者は狭く，臭く，陰湿で，虫が湧くような場所で，過酷な労働を強いられ，毎日同じメニューの腐りかけた食べ物を与えられていた。彼らはまちがったことをしたのだから罰せられなければならない，刑務所は彼らを善良な市民から隔離する場所であるというのが当時の関係者の常識であった。

ディックスの著作がきっかけとなって，全米各地に博愛団体がつくられた。ニューヨークには1844年に「ニューヨーク刑務所協会」がつくられ，ビゲローの友人であるベンジャミン・バトラー，ジョン・オサリバン，セオドア・セジウィックらが会員になっていた。

刑務所監査官になってすぐに，ビゲローは州内の刑務所の調査にでかけた。そして着手すべき課題は,「刑務所は罰するための施設か救済のための施設か」というような大問題の解決ではなく，刑務所内に規律を確立するという実際的問題であると考えるようになる。彼が提案し実施に移された政策は，看守による私的な刑罰をやめさせる，所長のみが違反に対する刑罰を科し得る，看守に読み書きの能力を要求する，地元業者と看守の癒着を断つ，業者を変えることで賄賂をなくす，ならず者の看守を解雇し改革志向の牧師を所長に任命する，などの諸改革であった。

ビゲローを含む改革派と旧来の看守たちの利益を守る守旧派との対立があったため，これらの決定は常に3対2の多数決で行われた。彼は一期目でそれなりに刑務所改革に貢献したが，さらに改善が必要だと考えていたので再任されることを望んでいた。しかし州憲法の改正により，監査官の地位は知事の任命から選挙による選出に変えられた。急進的な自由土地党の支持者であったビゲローが選挙で当選することはありえない。彼は再任を断念せざるをえなかった。

## 4　リベラルなジャーナリスト

ビゲローは，刑務所監査官になる少し前にニューヨークの著名な弁護士とともに法律事務所を開いていたが，彼の関心は法律よりジャーナリズムに向けられていた。したがってオサリバンから『デモクラティック・レヴュー』のフルタイムの編集者にならないかと誘われたときはたいへん喜んだ。しかし経済的報酬を考えると法律家の仕事は捨てがたく，結局，弁護士業を続けながら，オサリバンとは年500ドルの報酬で，毎月20ページの原稿執筆と『デモクラティック・レヴュー』の政治部門の編集をするという契約を結んだ。

前述のとおり，彼は急進的な民主主義の提唱者だった。エッセイでは，保守派の政治家，宗教家を非難し，科学者と職人（artisan）のみが古い社会秩序を解体し改革しうるという主張を展開した。そして科学者や職人が十分に活動できるためには，市民的自由と個人の独立が保障されていなければならない。そこで彼は，男女平等，人種平等，財産資格を問わない普通選挙と，あらゆる公

職者の選挙による選出を提唱した。このような記事を載せている『デモクラティック・レヴュー』に，ウォルト・ホイットマン，ナサニエル・ホーソーン，ジョン・G・ホイッティアーなどの詩人・小説家が投稿した。この事実から，われわれは，彼らに共通する民主主義への情熱をうかがい知ることができる。

ビゲローがウィリアム・カレン・ブライアントとの親交を深めたのもこの頃であった。両者の基本的な関心や考え方がよく似ていたことが二人をいっそう近づけた。どちらも人類の進歩を信じていたが，瞬時に世界を変える万能薬的な「イズム」があるとは思っていなかった。狂信的思考を拒絶し，改革への実際的で漸進的なアプローチを望ましいものと考えていた。政治的にはともに，自由貿易，健全通貨を支持し，ポーク大統領の拡張主義に反対するジャクソンニアン・デモクラットだった。彼らによれば，テキサス併合はメキシコに対する宣戦布告に他ならなかった。

ただし，ビゲローの領土拡張反対論は必ずしも道徳的な理由によるものではなく，節度のない拡張がアメリカの民主主義を危機に陥らせるかもしれないという危惧によるものであった。テキサス併合を認めれば，次はメキシコ，カナダを併合するという主張を押さえがたくなるであろう。将来，仮にメキシコを併合することになるとしても，今直ちに政治的発展の遅れたそれらの地域を合衆国に取り込むのは危険である。自治の経験の少ない地域の人々は，問題が生じれば中央政府に解決を求めるであろう。アメリカは分権的な民主主義国家ではなく，中央集権国家になりかねない。それはまさにビゲローらラジカルな民主主義者が避けたいと望んでいた事態である。仮に新領土の併合を行うとすれば，それは民主化のプロセスに時間をかけながら実施されるべきである。ビゲローはそのように主張した。

彼が1845年のニューヨーク州憲法修正に関して主張したことは，選挙権の拡大，公職者の選挙による選出の拡大，州議会議員の小選挙区制による選出，議会の起債の権限の廃止，商取引の自由を侵害するあらゆる検査の禁止，憲法修正手続きの簡略化などであった。選挙権は，白人黒人を問わず18歳以上の国民全員に与えられるべきである，また死刑制度は廃止されるべきであると主

張した。1845年の段階では急進的すぎる提案であった。

その後もビゲローのジャーナリストとしての仕事は増え続け，1848年には，ブライアントの要請で30%の株を取得して『イブニング・ポスト』の編集者となった。ブライアントとの共同編集であったが，徐々にビゲローの役割の方が大きくなっていった。彼はリベラルな立場で自己の見解を述べ雑誌の編集にあたった。1850年には奴隷解放の先行事例調査のためジャマイカに行き，社会の荒廃の原因は，黒人の劣等性ではなく，単一作物栽培や不在地主制に原因があるという論文を連載し，後には一冊の書物にまとめた。また，カリフォルニアの合衆国への加入をめぐって，自由州か奴隷州かの選択は住民の投票に委ねるべきであるといういわゆる「住民主権」の主張が高まってくると，人権擁護の立場からこれを強く批判する主張を表明し続けた。

そして1854年に，奴隷制を廃止したハイチを調査するために再度カリブ海へ向かった。そこで，彼はスウェーデンボルグの著作との出会いという人生最大の経験をすることになった。

## 5　スウェーデンボルグの著作との出会い

ビゲローがスウェーデンボルグの著作に出会ったのは，彼によると，神の摂理による出来事であった。彼がハイチのポルトープランスに滞在中に，黄熱病その他の悪性の熱病が蔓延し，アメリカへ戻る船が出港できなくなった。やむなくセントトマス島に渡ってニューヨーク行きの船をさがすことにしたが，そこでも2週間以上足止めを喰うことになった。そのときセントトマス島のホテルに泊まっていた客はビゲローとキエルフというデンマーク人の弁護士の二人だけだった。そのキエルフを通して，彼はスウェーデンボルグの著作を知ることになる。彼の手記に基づいてスウェーデンボルグの著作との出会いを以下に再現してみよう。

彼は暇つぶしのために，島で入手できるあらゆる本を読んだ。最後に残された本は，あまり気の進まない聖書であった。ホテルの食堂でアブラハムの物語をあらためて読んでいた彼は，キエルフに愚痴をこぼした。「この本が世界中

の高度に文明の発達した国々に，神のみことばとして受け入れられているのは異常なことではありませんか。アブラハムは恵みを受けるに最もふさわしい者として，地上のすべての人の中から天の父により選ばれたと自認しているが，あつかましいかぎりです。主が私を祝福する，私が祝福する者を主が祝福する，私を呪う者を主が呪う，私によって地上のすべての民族は祝福されるといった調子です。それなのに自分の身の安全を守るためには平気で妻に嘘をつかせる。パロとアブラハムではむしろパロの方が善人のように見えるではありませんか。[(3)]」

ビゲローはそれ以外にも長年，多くの聖書への疑問があったことを明らかにしている。「1. なぜ神はご自分のひとり子よりも，ご自分から罪に定めたこの世を愛されたのか。2. だれかの死によって，とくに無垢な者の死によって，どうして邪悪な者のために天界が備えられるのか。3. ご自分の無垢な御子が殉死されたことから，どんな満足を得られるのか。4. もしキリストの死が世の罪を贖うものなら，その贖罪の死のあとで犯した罪のために，なぜ罪人とされるのか，その贖いはあまりに効力のないものだったことにならないか。5. とりわけ，十字架刑の後，三日目に蘇り，御父の右側の自分の席に復帰するとキリストご自身が知っておられるなら，その死はこの上もない犠牲を表すとされているが，そういえるのか…これらがわからなかった[(4)]」。このようにビゲローは述べている。創世記の天地創造の物語も同様である。「光は第一日目の創造の業であり，植物の創造は三日目であった。ところが太陽は四日目まで創造されなかった。太陽がなければ光も植物も存在できないのは明らかである。しかも，第一日目にそう記されているが，太陽が創造される前に朝や夕がどうして可能なのか[(5)]」。

長老派教会の信者であった両親のもとで，教派の教えにしたがって厳格に育てられたにもかかわらず，彼は聖書については，完全に否定するわけではない

（3）　Bigelow（1979）邦訳 15－16 ページ。
（4）　同上，6 ページ。
（5）　同上，7 ページ。

が，数々の疑問から，これを高度な道徳の書以上のものとみなすことはできなかった。ここに見られるのはいかなる権威にも惑わされることのない徹底した合理主義の精神である。理性と論理にかなうものでなければ何ものも受け入れることはできないという姿勢である。その政治的表れが急進的民主主義の立場であり，宗教的には不可知論であったといえよう。

さて，そのようなビゲローの疑問に対するスウェーデンボルジャン，キエルフの回答は，「スウェーデンボルグは読みましたか？　スウェーデンボルグの『天界の秘義』に解説があるので，それを読めば予想以上の満足が得られるでしょう」というものだった。こうして彼はキエルフからスウェーデンボルグの著作を借りて読み始めるが，そのうちに寝食を忘れて読書に没頭するようになった。セントトマス島での長逗留の後，彼らはようやく脱出するための船を見つけ，ニューオーリンズ経由で帰国することになるが，20日以上かかった船中で，彼はスウェーデンボルグの著作の読書にふけった。「ほとんど狂気と思えるほど『著作』に没頭し，霊的な事柄について，とくに聖書についての私の持論に大革命がおこった。しかし，このことは同じような経験をした者にしかわかってもらえないだろう」と述べている。(6)

ビゲローがスウェーデンボルグの著作から学んだことは何だったのだろうか。彼はそれを七点に要約している。1.三一性（Trinity）の明確な理解。彼はこれまでは三一性（三位一体）を唱えながら実は三人（persons）の神を考えていたことに気づいた。スウェーデンボルグが教えるように，唯一の神が存在し，その神の中に三一性の位格（person）があると考えるべきである。2.父と子の二人の神を前提とする旧来の「贖い」の教えは誤りである。「贖い」とは人間の自己改革と再生のことであり，それは主の神的人間性の介在により行われる。3.天界と地獄は場所ではなく，たましいの状態を意味している。自己本位の心（スウェーデンボルグの用語では proprium）を克服して内部から再生しない限り，人は天界の喜びを味わうことはできない。4.すべての原因は霊的であり，すべての現象はその結果である。5.人類は天界の苗床である。霊界での

（6）　Bigelow（1979），34ページ。

生活はこの世の生活の連続であり，人は自らの愛の性格に応じて天界または地獄に住居を定めることになる。6.神の無限の愛は，すべての聖徒と同様，すべての罪人に与えられている。神はだれも罰しない。人生の苦難は刑罰ではなく，われわれが自らの誤りに気づき，よりよい生き方ができるようになるための慈悲深い警告である。7.スウェーデンボルグは相応の言語を明らかにした。これはこれまでの神学の分野でなされたもっとも重要な貢献であった。(7)

ビゲローはスウェーデンボルグの著作によってキリスト教の信仰を取り戻したのであるが，それが彼の人生にとっていかに決定的なものであったかを，少し長くなるが彼自身のことばで紹介しておこう。

「私の人生が最初からいかに利己的で世俗的であったかを理解し始めたのは，この恐ろしいほどの啓示の光によって，自分の心を探求し，自分の行為の動機を調べ始めてからであり，この啓示はそれほど私にとって新しいものであった。それでも，これはキリストの教えと実例にすべてはっきりと示されていた。自分の成功，そしてその名声をどれほど常に自分のものとしてきたか。どれほど自分の悪行を巧妙に弁解し，正当化してきたか。仁愛のかけらすらなく，『あいつはおれの利益・栄誉・誇りを傷つけた』と人のふるまいを裁いてきたことか。他人の幸福や福祉は，自分自身のそれに比べればなんとも感じなかったし，関心もなかった。他人に対する神の禁止命令は，それを私が他人に対して守ろうとするとき，どれほど実行不可能に思えたことか。自分と意見の違う者を悪く思うのはいかにたやすいことであったか。試練の待ち伏せに会って負けた仲間の罪人の救助に駆け寄るとき，いかにぐずぐずしていたか。そして適切な同情と援助が足りずに，道端に，怪我し血を流し，おそらく死んでしまうままに放置してしまったことか。いまや再生のすべての業は悪魔の一味といっしょになって働く利己心を追い出すことにあると悟った(8)」。

クラップが指摘するように，ビゲローへのスウェーデンボルグの影響力は決定的であったので，1854年以降，37歳から95歳で亡くなるまで，彼の人生は

（7）　Bigelow（1979），邦訳59－81ページ参照。
（8）　同上，64ページ。

スウェーデンボルグの聖書解釈にもとづく信仰と行動の基準を常に念頭に置かなければ理解できない[9]。彼は宗教的になったからといって，教会に足繁く通うようになったわけでもなく，現実の問題に関心を失ったわけでもなかった。むしろますます実社会の公共の問題に取り組むようになった。ただ，これ以降，彼は聖書の教えにしたがい，自分の現世的成功ではなく，社会への役立ちという観点から自らの行動を評価していくようになるのである[10]。

## 6　共和党の結成

ビゲローがハイチからニューヨークに戻った1854年3月は，奴隷制のさらなる拡大の是非をめぐって，アメリカ中が激論を戦わせていた時期だった。1月に北部民主党のリーダーであるスティーブン・ダグラスによって，カンザス・ネブラスカ法案が議会に提出されていた。これはカンザスとネブラスカを准州として組織し，奴隷制問題はそれらの准州議会によって決定するというものであった。奴隷州になるか自由州になるかは准州の住民が決めるという「住民主権」の主張であり，一見，民主的制度のように思われるが，実際は北緯36度30分以北で奴隷制を禁止することを決めたミズーリ協定を破棄し，奴隷制を全米に拡大させるしかけになっている法案であった。北部の人民，有力政治家の嵐のような反対にもかかわらず，ダグラスの法案は3月4日，南部上院議員の支持を得て上院を通過し下院に送られた。

ビゲローがアメリカに戻ったのはちょうどこの時期であった。彼はただちにブライアントとともに，法案に反対する論説を書いている。しかしネブラスカ法は113対110の僅差で下院を通過した。北部の大勢の民主党員，ホイッグ党員，自由土地党員，奴隷制即時廃止論者などの怒りは，ただちに新党結成のエネルギーへと転化した。ネブラスカ法案が下院を通過した翌日に，30人の議員たちが新党，共和党の創設に署名した。そして7月のミシガン州の共和党結成を皮切りに，2ヶ月以内に7州で奴隷制反対の新党が結成された。ただニュ

(9)　Clapp (1947), p. 93.
(10)　同上，p. 93.

ーヨークではビジネスの利益が南部とより密接であったため，他の北部諸州より新党結成へ向けての動きが鈍く，共和党結成の呼びかけにも無反応の状態だった。

ブライアントとビゲローはネブラスカ法には強い反対の立場であったが，新党については暫時様子見の立場をとった。ポスト紙の読者はインテリのジャクソン主義民主党員であり，政党への忠誠心が強かったからである。北部の民主党員の間には，奴隷制反対という一時的な単一争点で新党に賭けるわけにはいかないが，いつまでも南部のいいなりになるわけにもいかないというジレンマがあった。

しかし時代の流れは確実に政党連合の動きが強まる方向に向かっており，ニューヨークでも新党結成は避けられない状況だった。ただビゲローらが危惧したのは，新党結成が彼らにとっては政敵であるホイッグの主導の下に行われつつあったことだった。しかし1855年末，連邦下院議長の選出をめぐって奴隷制への賛否が，全米で決定的な争点になったため，この時点でポスト紙は民主党と決別し共和党支持を宣言することになった。

共和党の最初の全国大会は1856年2月22日にピッツバーグで開催され，役員が選出された。第2回大会は6月16日にフィラデルフィアで開かれ，ここで綱領が採択され，大統領候補が選出された。共和党創設メンバーには，オハイオ州知事で自由土地党の指導者サーモン・チェイス，ホイッグでニューヨーク選出の上院議員ウィリアム・スアードなど大統領候補と目される人たちがいたが，結局，政治家としては未知数の若い西部探検家ジョン・フリーモントが大統領候補になった。共和党はまさしく妥協の束であったため，どのグループからも反対が出ない最大公約数的人物を中心に据える必要があったのである。「政治家としては新人で知名度の高い人物，ホイッグにも民主党員にも警戒心を与えないような経歴の持ち主，奴隷制即時廃止論と原住民保護政策論にかぶれたことはないが，その支持者のいずれにも受け入れられるような人物，奴隷制の拡大には反対であるが南部で嫌われない人物」[11]という条件である。その結

(11)　Clapp (1947), p. 98.

果，実績のある有力政治家が排除され，新人のフリーモントが大統領候補に選出された。

ビゲローは共和党の創設者の一人として，フリーモント大統領候補選出のプロセスに深く関わった。フリーモントに最初に注目したのは，ジャクソン主義民主党の指導者でありジャクソン大統領の政治顧問であったフランシス・ブレアであった。ビゲローはブレアと政治的に立場が近かったので，彼から「フリーモント案」の打診を受けたのだった。ビゲローは実際にフリーモントに会って好感を持ち，フリーモント大統領実現のために支援することを約束した。彼が行ったことは，1.ブライアントを説得してポスト紙でフリーモントを大々的に宣伝していくこと，2.面識のある共和党の幹部にブレアを引き合わせること，3.彼自身が大統領選挙向けにフリーモントの伝記を書くこと，4.選挙運動本部で仲間とともに選挙運動を取り仕切ることであった。

ビゲローの書いたフリーモントの伝記は4万部が売れ，ベストセラーになった。その要約版はポスト紙でも連載された。伝記執筆の仕事が終わった8月からは，彼は選挙運動本部やフリーモントの家で仕事をし，開票の夜はフリーモントの家族やブレアらとともに選挙結果を見守った。結果は民主党1,838,169に対し共和党1,341,264と敗北を喫したが，誕生して2年の新党としては善戦したといえる。ビゲローはこのように56年の選挙では熱心にフリーモントを支持したが，選挙後は分裂したアメリカをまとめていく大統領としての資質はないと評価を変えるようになり，ビゲローとフリーモント家の関係は急速に冷えていった。彼は，56年の時点では，奴隷制に賛成する政党と反対する政党とが存在するという違いを際立たせる点においてフリーモントの存在意義があったと考えるようになった。後年，当時を振り返って次のように述べている。「彼は長生きをしたが，もし彼が大統領になったら取り返しのつかない失敗を犯すことになったかもしれないと誰もが思うようになった。くさびは丸太を割るときには役立つかもしれないが，分かれたものをひとつにするという点では役に立たない[(12)]」。

(12)　Bigelow (1909), vol. I, p. 145.

56年は，大統領選挙では負けたが，ビゲローにとってはかけがえのない経験をした年だった。38歳という若さで共和党の創設に関わり，全米レベルの有力政治家と交流することができた。そして政治的宣伝家，戦略家として高い能力があることを多くの人々に示すことができた。

## 7　南北戦争

1858年から60年にかけて，彼は家族とともにフランスを中心にヨーロッパで18ヶ月間の長い休暇を過ごした。これは彼にとって充実した時間であった。フランスやイギリスの作家や政治家などとの交流があり，また意外にもフランスにおいて同国人のスアードと親交を深める機会をえた。そして大統領としての資質をもっとも多く備えているのはスアードだと感じるようになった。

60年の大統領選挙の少し前に帰国した彼は，選挙後，43歳の若さでやや唐突にポスト紙の経営権を友人に売り払って引退している。それは本人にとっても思いがけない決断だったようであり，理由ははっきりしない。念願であった共和党の勝利，ジャーナリストとしての成功，引退できるだけの十分な資産形成，長期のヨーロッパ旅行の経験などからある種の達成感をもったのかもしれない。いずれにせよ60年から61年にかけての冬は，アメリカ同様，彼にとっても一大転機であった。

引退したものの，彼の悠々自適の生活は3ヶ月と続かなかった。61年4月12日，南軍によるフォート・サムター攻撃により南北戦争が始まったからである。「簒奪と混乱ではなく秩序ある自由を愛するすべての善良なる市民は大会に集まられたし」の呼びかけに呼応し，4月20日に開催されたユニオン・スクエアの集会では，ビゲローはさっそく事務局員を務めた。そして旧友のプレストン・キング上院議員やモーガン州知事などに，この難局にあたっていかなる任務でも引き受けて役立ちたいという趣旨の手紙を書いた。結局，国務長官になったスアードから彼に与えられた任務は，パリ領事として，ヨーロッパにおける外交活動によって北軍を掩護すべしという内容であった。

南北戦争においては南部にとっても北部にとっても，ヨーロッパの外交がき

わめて重要であった。[13] ビゲローは「南北戦争のある段階では，その運命は戦っている当事者より，むしろ，大西洋の対岸にある列強によって決定されるのではないかと思われた」とさえ述べている。[14] もし大西洋の海上航路が開かれたまま，イギリスやフランスから南部に兵器が供給され続けるなら，北部は敗北するかもしれない。もしイギリスやフランスが南部連合と同盟を結んで攻撃してくることになったら，北部は敗北するかもしれない。事実，南部はすでにウィリアム・ヤンシーという有能な大物政治家をリーダーとするグループをヨーロッパに送り込んで，北部の海上封鎖をやめさせ南部連合を政府として承認させるための工作を開始していた。

当時フランスに駐在するアメリカ公使はウィリアム・デイトンであった。彼は56年の大統領選挙におけるフリーモントの副大統領候補であり，政治的経歴では公使として申し分なかった。しかし危機的状況の今，必要とされているのは肩書きではなく実質的な外交の実務能力であった。彼がスアード国務長官に求めた支援は，フランスの報道・出版界につながりをもち文章も書ける領事の派遣であった。その任務をもっともよく果たせる人物はビゲローのほかにいないというのがスアードの判断であった。そのようなわけで，彼の仕事は，フランスにおけるアメリカについての報道を北部にとって好意的なものにすること，南部の外交に対抗すること，そしてフランスをアメリカ内部の問題に介入させないことであった。

領事として彼が重責を果たした事例のひとつが「トレント号事件」であった。これは1861年11月9日，イギリスに向けてハバナを出航したイギリス船トレント号がアメリカの軍艦に拿捕され，乗船していたメイソンとスライデルとい

(13)　結果的にはイギリスやフランスは南北戦争に介入しなかったので，アメリカ史のテキストではヨーロッパとの関係はあまり触れられることはないが，斉藤真（1975），p. 102には次のような指摘がある。「南部は，その豊富な原綿の供給がイギリスの産業資本にとって欠くべからざるものであることを知っており，その意味でイギリスの経済的かつ軍事的援助を期待していたことが指摘されよう。いいかえるならば，南部はこの圧倒的な不利の予想される北部との戦争を，単なる内戦から，国際紛争へとエスカレートさせることによって有利に戦うことを期待していたといえよう」。

(14)　Bigelow（1884），p. iii.　なお，南北戦争当時のフランスにおける外交の記録を，ビゲローは20年後にこの書物にまとめ出版した。

う二人の南部連合の行政官が下船させられた事件である。これは北部では英雄的行為として賞賛されたが，イギリスでは国家の名誉を傷つける許されざる行為であるとみなされ，イギリス政府はアメリカに対し謝罪と二人の行政官の解放を求める最後通牒を突きつけた。フランス内でも，アメリカを非難し，中立の権利は保障されるべきであるという主張が大勢を占めた。また英米の戦争が始まるのではないかという憶測あるいは期待もあった。フランスは英米が戦争しても南部との貿易には支障がないであろうと予測していた。一方，南北戦争のさなかにイギリスと戦争する余裕のないアメリカとしては，自らの行動の正当性を主張しつつも，絶対に戦争を避ける方策をとる必要があった。

トレント号事件の直後，北部はヨーロッパの中でほとんど孤立状態であった。ビゲローはフランスの友人たちに北部の立場を粘り強く説明したが，それに理解を示した人々が，今度は彼にアメリカの立場を新聞に発表することを勧めた。彼は政府を代表する外交官としてそのような非公式の見解を公表することは許されていなかったが，あえて別人の名を借りて公表した。彼が主張したのは次の諸点であった。1. アメリカが行ったのは反乱軍のスパイの逮捕である。戦時における禁制品輸送の疑いのある商船をアメリカの戦艦が検査する権利を問題にする政治家はイギリスにはいないであろう。それはパリ条約で認められている権利であり，イギリスがその権利を放棄したことはない。世界のあらゆる海峡や内海にあるイギリスの大砲がそれを証明している。2. 近い将来，世界の海洋国家が中立の通商を認めることに合意するであろう。アメリカはこの50年間，この目的の実現に努力してきたし，現在も同じ立場である。3. そのような権利が包括的，継続的に国際間に確立されるまでは，イギリスがアメリカの行為をとがめることはできない。それはイギリス海軍自体が行ってきた行為だからである。4. このような状況でイギリスがなお2名の南部行政官の返還を求めるなら，それは中立の権利に関する国際法の改定が必要であるという確信のもとになされているとみなさざるをえない。5. 他方，もし現在の海洋法によって支配的海軍国に与えられている有利な立場を放棄する用意がイギリスにないとすれば，それをアメリカに要求するという誤りを犯すことはないであ

ろう。いずれにせよ，アメリカとイギリスの友好関係が揺らぐような差し迫った危険性はない。

ビゲローの論稿は翻訳されイギリスの新聞でもそしてアメリカでも掲載された。その影響は大きく，これによって冷静な目をもったヨーロッパの人々に，トレント号の拿捕はアメリカ政府の直接の命令によるものではなかったので，戦争を口にする前に次のアメリカ政府の対応を見ようという態度をつくりだした。またイギリスの主張に問題があることも理解された。一方，アメリカ政府は最終的に2名の南部の行政官を引き渡し，最悪の事態に陥ることを回避した。

ビゲローの領事としてのさらに大きな貢献は，フランスにおいて南部がひそかに着手していた軍艦建造を事前に察知し中止に追い込んだことである。当時，イギリスとフランスだけが南北戦争の行方に影響を与えうる国であったので，前述のとおり，南部は両国の支援をとりつけるためにそれぞれメイソンとスライデルを送り込んだ。彼らの任務のひとつが，北軍による海上封鎖を実力で排除するための軍艦をイギリスとフランスから調達することであった。この南部の計画はイギリスにおいては成功し，アラバマとフロリダの2隻の軍艦が航海を開始した。これに対し，フランスではビゲローが迅速，適切に対処することによって，この計画を阻止したのであった。

1863年7月，ゲティスバーグの戦いで北部の勝利が見えてきた頃，パリではビゲローが駐ベルギー公使のサンフォードと諜報活動の打ち合わせをしていた。南部がフランスの造船所で軍艦を建造しているといううわさがあったので，その真偽を確かめるためスパイを送ることにしたのである。ビゲローらがえた情報は，フランスで2隻の南部向けらしい戦艦が建造中であるというものであった。しかし確たる証拠はなかった。決定的証拠がえられたのは9月であった。フランスの子爵トレマンなる人物がビゲローを訪れ，表面上は中立を装っているフランスで，フランス政府の許可のもとに，南部連合向けの戦艦建造が行われていることを示す文書を見せた。

この時点で判明したことは，連合はフランスで4隻の木造帆走軍艦

（corvette）と2隻の衝角艦（ram）を建造中であり，さらにイギリスで建造中の2隻の衝角艦をフランスで受け取る予定であること，また，表面上は中立を装っているにもかかわらず，皇帝と海軍大臣はこれに承認を与えていたということだった。ビゲローは証拠の文書の写しを国務長官スアード，駐フランス公使デイトン，そしてサンフォードに送付した。フランス政府との折衝はデイトンが行った。

ビゲローは，この文書のもっとも効果的な活用方法への助言を知人のアントアーヌ・ベリエに求めた。彼は73歳になるフランス法曹界の重鎮で，正統主義者であった。1848年の議会においては議員として活動し，その後隠退していたが，ナポレオンに反対するために再度政界に復帰していた。彼の助言は南部の船を建造中の造船業者を裁判所に訴えるというものであり，そのための準備が進められた。一方，北部の抗議を受けて，10月23日に，フランスの外務大臣ルイはデイトンに対し軍艦の製造許可は取り消されたと伝えた。しかし11月6日には，これを知った南部のスライデルがナポレオンとルイに猛烈に抗議し，南部の造船計画は従来どおりという返事を引き出した。このように，フランス政府の方針は大きく揺れ動いた。

この頃，イギリスで建造された南部の小型砲艦ラパハノック号が，イギリスから海峡を渡ってカレーの港に入港するという事件があった。ビゲローはフランス政府に圧力をかけ続け，戦争の終わりまで，この砲艦の出港を阻止することに成功している。しかしそれ以上に重要なことは，フランスにおける戦艦の建造を中止することをフランス政府に明確に約束させることであった。11月23日に，ナポレオンは，北部が問題にしたボルドーとナントの船の建造作業を，造船会社が南部との関係を断つまですべて停止せよと命じた。ビゲローが決定的証拠を握っていたので，ナポレオンはそうせざるをえなかったのであるが，彼はそれでも皇帝の決定が最終的なものであるとは信じなかった。その中立を守るという決定をいかにフランスに実行させるかが重要であった。

前述のとおり，ベリエとの協議では訴訟を行う予定であったが，時間がかかりすぎると判断し，議会で暴く作戦に変更した。しかしこれも実現せず，結局，

ビゲローがジャーナリストのマルスピンに資料を提供して論文執筆を依頼し，それを『国民の意思（L'Opinion Nationale）』紙に発表することになった。編集者のゲルーは，建造を請け負った造船会社の経営者であり代議士でもあるアルマンと国務大臣にこれを突きつけ，もし艦船が南部に向かうことはないという確証が24時間以内に得られるなら論文を公にしないと約束した。アルマンは狼狽し，すべては過去のことであり，艦船はチリに行くことになっていると答えたものの，期限内に確たる返答はなかったため，1864年4月30日に論文は発表された。この問題は議会の反対派によって取り上げられ，政府は目的地に疑義があるかぎり一隻の船もフランスの港を出港することはないと議会で確約せざるをえなかった。

1864年初頭，北部の勝利は確実に思われたが，ビゲローは，連邦はまだ外交において勝利を収めていないと感じていた。ここに至って，ようやく外交においても勝利が見えてきたと感じられた。ビゲローがパリに赴任した当時はフランスの世論やマスコミはほとんど反北部であったが，1864年の時点ではほとんどが反南部になっていた。目的を達成したビゲローは外務公務員制度の改革を提案し，領事をやめて帰国を希望した。ところが1864年12月に公使デイトンが死亡。スアードはビゲロー以上の人物はいないとして，彼を代理公使に任命した。

1865年の問題は，当初スフィンクスという名で建造されデンマーク政府に売られた戦艦が，ストーンウォールという名で南部の船になり，今まさにスペインのフェロルを出航しようとしているという事件だった。ビゲローはフランス政府に強力に働きかけ，出航をやめさせる努力を行った。3月24日にストーンウォールは出航するが，もはや戦争は最終局面を迎えており，戦艦はなすところなく7月に合衆国に投降した。

以上述べてきたように，ビゲローはヨーロッパで戦われた外交戦としての南北戦争においてもっとも重要な役割を演じた人物であった。もし南部の工作が成功し計画されていた戦艦が大西洋に出現したなら，戦争がさらに長引いた可能性は大いにあった。その意味で，ビゲローの祖国への貢献は非常に大きかっ

たわけである。

## 8　1865年以降

ビゲローは長命であったので，その後も数多くの役立ちをしているが，もっとも大きな貢献は，上述の南北戦争時に外交官として南部の戦艦の建造，フランスの港からの出港を未然に防止した仕事であったので，それ以降の彼の公的生活については手短に述べたい。

南北戦争時の功績を買われて，1865年4月，彼は正式に駐フランス公使に任命された。公使としてもっとも重要な課題はメキシコ問題であった。この問題の発端は，1861年，メキシコが外国からの借款の金利を支払えないとしたところにあった。ヨーロッパの債権国は貸し付けたお金を実力で回収しようとしたために，アメリカではその対応をめぐって論争が生じた。61年の秋，イギリス，フランス，スペインは合同の遠征隊をメキシコに送った。アメリカはワシントン，モンローの外交政策の伝統から，ヨーロッパ諸国のアメリカ大陸への介入には抗議したかったが，当面は南北戦争という国内最大の危機に集中せざるをえなかった。また，不用意にイギリスとフランスを挑発すると南北戦争への両国の介入を招く恐れもあるという微妙な問題であった。

1862年春にスペインとイギリスは撤退したが，ナポレオンは介入を続け，1863年にはオーストリアのマキシミリアンにメキシコ皇帝位を与えると約束した。アメリカ国内には軍人やマスコミを中心にフランスに強硬な姿勢をとることを主張する勢力があった。しかしスアードは平和的手段でフランス軍をメキシコから撤退させる意向であった。そこで，ビゲローは「優柔不断なフランス公使」という非難を浴びながらも，フランスと粘り強い交渉を行い，66年から67年にかけてメキシコからの撤兵を実現させた。彼は，公使としての役目を果たした，また，その後の仕事が次第に政府要人の接待になったという二つの理由で，公使の職を辞して帰国した。

帰国後しばらくは文筆業にはげんだ。1868年にはフランス滞在中から蒐集していたフランクリン文書を整理して『フランクリン自伝』を編集し出版して

いる。また，1869年には一時的に『ニューヨーク・タイムズ』の編集者になった。1870年にはドイツに移住し，71年，第三共和制が成立する前に『フランスと世襲君主制』を出版した。彼の批判の矛先はティエール，カトリック教会そして世襲君主制に向けられた。他方，71年のパリコミューンには共感を覚えている。

1873年に帰国後は，グラント政権の腐敗・汚職事件と大統領三選問題をきっかけに，反グラントの立場から政治活動に復帰する決心をした。74年にニューヨーク州知事になったティルデンは，エリー運河経営の長年にわたる不正を暴くため，超党派の調査委員会を設置したが，その委員長にビゲローを任命した。ビゲローは共和党，一方，旧友のティルデンは民主党だったので，調査委員会の長として知名度の上がったビゲローは，両政党から選挙による公職への出馬要請を受けた。結局，彼はティルデンと行動を共にすることを選択し，1875年に民主党に移り，ニューヨーク州書記官（Secretary of State）の選挙に出馬し当選した。州書記官になったビゲローの最大の仕事は州知事のティルデンを次の大統領にすることであった。ティルデンは76年の選挙で民主党の大統領候補になった。選挙は歴史に残る接戦で，票数計算をめぐる争いから，翌年1月になっても当選者が決定できず，連邦議会議員と最高裁判事からなる委員会が設置されることになった。そして，その委員会の8対7の多数決で共和党のヘイズに軍配が上がるという結末で幕となった。

1884年の大統領選挙の際は，ビゲローはクリーブランドを支持して，しぶるティルデンに引退を決意させた。翌年，そのいわば政治的報酬としてクリーブランドから，財務省副出納局長のポストを打診されたが，彼自身も後進に道を譲るために辞退を決意，これをもって政治活動に幕を下ろした。

1886年から94歳でなくなるまでの25年間は，海外や国内を旅し，政治家や市民からの質問の手紙に返事を書き，雑誌に論文を投稿し，ブライアントとティルデンの伝記を書き，自身の大部の回想録を書き，州憲法の草案づくりに参加し，さまざまな市民的活動に参加し，ニューチャーチ（スウェーデンボルグ派の教会）に通うなどして過ごした。

多くの仕事をしたが，この間の仕事の最たるものは，ニューヨーク公共図書館の創設であったといえよう。ティルデンはニューヨークに公共図書館を建設するための資金を遺して他界し，ビゲローがその遺言執行人となった。当時，ニューヨークにはアスター，レノックスの二つの一般に開かれた図書館があった。いずれも個人の資産でつくられた図書館であった。ビゲローはティルデンの遺産とこれらの図書館を統合して，ニューヨーク公共図書館を建設しようとした。さらに，運営をニューヨーク市が行うという条件で，カーネギーからの寄付を獲得し，これらを合わせて図書館の建設が進められた。そして，ティルデンの死から15年後という長年月をかけて，1911年に公共図書館は完成した。ビゲローは93歳になっていたが，図書館の理事長として，タフト大統領を招いて落成式を祝った。

## Ⅲ　ま　と　め

ビゲローの生涯は，人間の個性が宗教的影響を受けていかに変化・洗練されていくかについての興味深い実例のひとつである。彼はもともと積極的で自己主張の強い性格で，謙虚さとは縁遠い人物であった。青年期には成功を求める野心もあった。その積極的，社交的性格は生涯変わらなかった。しかし，聖書とスウェーデンボルグの著作の影響によって，富と名声の追求をやめ，社会に役立ち，それをとおして神に仕えるために自己の能力を最大限生かす場を求めるという姿勢に変化した。

彼は聖書を読み瞑想することを毎朝の日課にしていた。読み通すのに努力を要する『天界の秘義』を4回通読した。晩年に，自分にもっとも影響を与えた書物を10冊あげてほしいと求められて，聖書と『天界の秘義』12巻と答えている。スピリチュアルな話がわかる人にはスウェーデンボルグの著作を気前よく貸したりプレゼントしたりした。スウェーデンボルグ派の教会である新教会にも通った。しかし，スウェーデンボルジャンと呼ばれることは好まなかった。彼はクリスチャンであったし，スウェーデンボルグは聖書を解釈したにすぎないと考えていた。そして，なによりもスウェーデンボルグ自身が自分の教会を

つくったり，教祖になることはなかったという事実を重視した。ここに見られるビゲローの冷静で合理的な精神には，スウェーデンボルグと相通ずるものがある。

彼は紳士録に作家（author）と紹介されたが，彼の職業を一言で言い表すことは困難である。弁護士，ジャーナリスト，選挙の戦略家，雑誌編集者，政治家，外交官，市民運動家，財団理事長など実に多くの仕事をした人だった。もしティルデンが大統領選挙で当選していれば，おそらく彼の国務長官として歴史に名を残したであろう。しかしそれは実現しなかった。ともあれ，あえて一言で言うならば，伝記作者のクラップが指摘するように，アメリカ「第一の市民」と呼ぶのがいちばんビゲローにふさわしいのであろう。彼は駐フランス公使にまでなったが，それは祖国にとって必要な仕事をするためであって，必要がなくなったと思えばさっさとやめて帰国している。大統領選挙で自分が必要と考える政治的活動もしたが，それを自分の権力追求の手段にすることはなかった。すべては社会への役立ちをとおして神に仕えるためであった。自分の持ち物，資産や教育や才能などすべては神からのあずかり物であり，したがって何か賞賛に値することをしても自分の功績にすることはなかった。不正とは戦ったし，人権や民主主義の理想を率直に語って，自分の出世のためにそれらを犠牲にするようなことはなかった。そのような人物であるからこそ，ティルデンからも遺言の執行人に選ばれたし，政治家から作家や芸術家，一般市民にいたるまで広範にわたる良好な人間関係を築くことができたのであった。

もちろんそのようなビゲローの信仰の重要性は外からは見えにくい。それは彼と親しい人々だけが気づいていたことである。しかしクラップは次のような小さなエピソードを紹介している。ビゲローは，ティルデンの伝記を書くために蒐集し大切に取っておいた写真を別の伝記作家に譲った。そして日記にはこう書いた。「これらを自分の仕事のためにとっておいてもよかったが，そういう動機に屈したくなかった」。しかし彼はまた，信仰心において一番になるつもりもなかった。『黄金律』という論文の中で書いている。「一番になろうとするのは世俗的名誉心のあらわれである。ビリになろうとするのは独善的うぬぼ

れのあらわれである」と。[15] これは，あたかも自分からなすように善をなすべきであるが，すべての善は神から来るのであり自分の功績にしてはならないというスウェーデンボルグの教えを彼流に表現したものといえよう。回心して後の彼の活動の動機はこのようなものであった。

ビゲローの生涯を振り返ることは，スウェーデンボルグの宗教思想に関心をもつ者にとって，いろいろな意味で示唆的である。スウェーデンボルグの神学書は，善，真理，役立ちなど非常に抽象的なことばで書かれている。それらの概念を日常生活の中でどう具体化し実践に結びつけていくかは，著作の読者に課せられたいわば宿題である。そして，これまで見たように，ビゲローは彼自身の生き方によって，この問題に対するひとつの見事な回答を提示してくれているのである。

また，アメリカ社会によるスウェーデンボルグの宗教思想の受容という観点から見ると，ジャクソニアン・デモクラットで，ジェファソン，ペイン，トックヴィルの著作の愛読者であったビゲローが，スウェーデンボルグの宗教思想をなんら心理的抵抗なく受け入れたという事実が重要であろう。それはアメリカの民主主義の伝統とスウェーデンボルグの宗教思想の調和を示唆しているように思われるからである。

## 引 用 文 献

Bigelow, J., (1888), *France and The Confederate Navy 1862-1868*. (London Sampson Low, Marston, Searle, & Rivington).

Bigelow, J., (1979), *The Bible That Was Lost And Is Found* [1893]. (Swedenborg Press) (鈴木泰之訳 (1997)『見失っていた聖書が見つかった』(クエリテ出版)).

Bigelow, J., (1909), *Retrospections of an Active Life*. Vols. 1-3, (New York, Baker & Taylor Co.).

Clapp, M., (1947), *Forgotten First Citizen: John Bigelow*. (Little, Brown and Company Boston).

斉藤眞 (1975),『アメリカ政治外交史』(東京大学出版会)。

(15) Clapp (1947), p.335.